

ポスター報告 37

桑原 牧子 金城学院大学

#報告題目 文化人類学身体加工研究からの義肢装具への考察

#報告キーワード 義肢装具 身体加工 文化人類学

#報告要旨

本発表では、身体改造とアートの領域で製作され装着される義肢装具を取り上げ、新たな身体の捉え方を文化人類学の身体加工研究から提示する。身体加工（あるいは、身体変工）は身体に不可逆的な加工を意図的に施す行為であり、世界各地で行われてきた。加工が施される年齢や契機は様々であり、通過儀礼の中で、または、親族が亡くなる、子供を出産するなどの重大な出来事が起きた時などである。ジェンダー、階層、職業ごとに施される身体加工が決められていることも多い。一時的に身体を装飾する衣服、装飾品、フェイシャル／ボディ・ペインティング、化粧などとは異なり、身体加工は永続的もしくは半永続的に身体を変えることから、施術後は被加工者の重要な身体的特徴の一つとなる。身体加工の種類には、皮膚を傷つけ染料を入れるイレズミ、皮膚を傷つけたり焼いたりしてしるしをつける瘢痕、耳、鼻、口唇などに穴をあける穿孔、頭蓋、首、歯などの変形、性器の切開や縫合、一部切除を施術する割礼、指、鼻、耳などの切断、抜歯、去勢など身体部位の除去、口唇、性器などへの埋め込みなどがある。このうち、本発表で取り上げる義肢装具と関連するのは身体部位の切断・切除による欠損であり、人類学では社会的慣習での指、耳、鼻、性器、歯の切断および一部の切除・除去が研究されてきた。

身体の完全性（wholeness）に価値を見出す近代西欧に対し、文化人類学の身体加工研究は、「完全な（whole）身体」に加工を加え、余剰を生んだり欠損させたりすることによって「社会の身体」を作り上げる実践を提示してきた。つまり「完全な（proper）社会の身体」は、社会ごとに決められた人工的な加工が施された身体といえる。このような「非西欧の奇異な慣習」とみなされてきた身体加工は上記の近代西欧の「身体の完全性」や身体に関わる「自然／人工」、「主体／客体」、「健常／障害」の二元論へ疑問を投げかける潜在力を宿していた。しかし、実際にそのような近代西欧の身体観への批判が顕著に表れ出したのは80年代から欧米で始まった身体改造ムーブメントからである。イギリスの

Alternative limb project の義肢装具はこの身体改造の流れに位置付けることができ、上記のような身体性を考察する上で興味深い示唆を与えてくれる。Alternative limb project では装具士 Sophie de Oliveira Barata が、最新の素材やテクノロジーを従来の個々の装着者の身体や意向に合わせて装具を製作する職人的作業に導入して、アート性の高い義肢装具を製作する。欠損部位の「補充」するのに留まらず、身体機能および装飾の両領域において身体性の強化・拡張するものとして義肢装具を捉えなおし、「障害の身体」を問い直す。

非西欧社会における慣習として行われる身体加工と病気や事故により手足を切断し義肢装具を装着するのでは、切断にいたる背景や経験はもとより、切断および義肢装具装着が内包する意味、被施術者・義肢装着者の自らの身体との関わり、そして社会との関わりが異なるであろう。しかし、本発表では、義肢装具を装着するに至る背景から義肢装具を考察するのではなく、義肢装具が装着者の身体に与える作用に焦点を当てる。とりわけ、文化人類学が研究対象としてきた身体加工の機能的な側面と義肢装具の持つアート（美）的な側面が当該社会で生きる人々の身体に与える作用に照らし合わせながら、義肢道具装着者の身体性について考察することを試みる。

尚、本発表は日本社会福祉学会研究倫理規程に則り、人権を尊重し、年齢、性別、人種、国籍、思想信条、宗教、社会的地位、障がいの有無などにおいて差別的な取り扱いをせず、人々の福祉に寄与・貢献することに資することを目的とする。